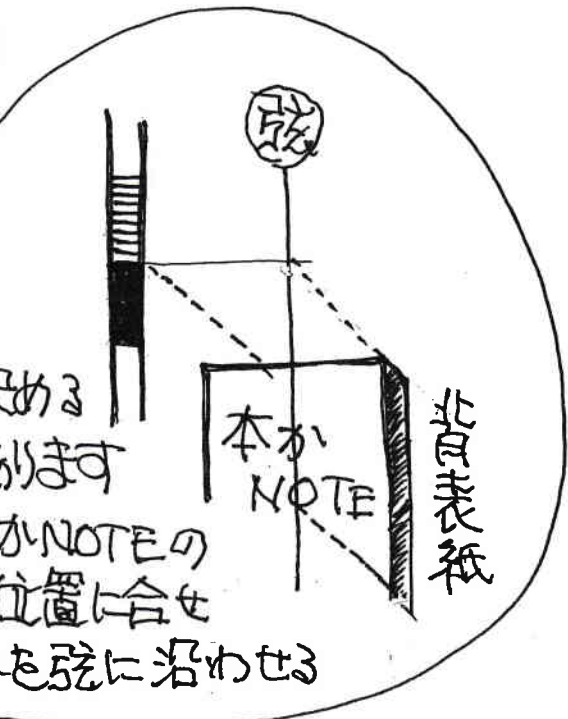
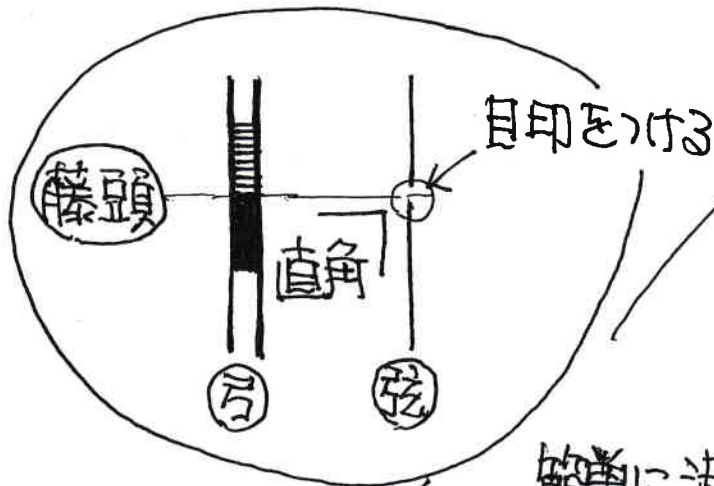


弦に目印をつける

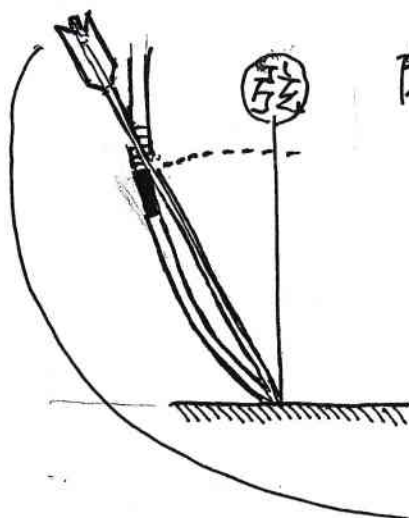
矢番之の位置は矢摺藤と握皮の境目^{とかしら}一藤頭を基準にして決めます。中仕掛を巻く位置(巻き始める位置)も藤頭から導き出します。



簡単に決める方法もあります

背表紙のある本がNOTEの天辺を藤頭の位置に合せ背表紙の上と下も弦に沿わせる

一般的によく行われている方法



床に立てた弓の藤頭に矢を当ててその高さを弦に移す。

細かく云えば円弧であり厳密には直角とは異なる

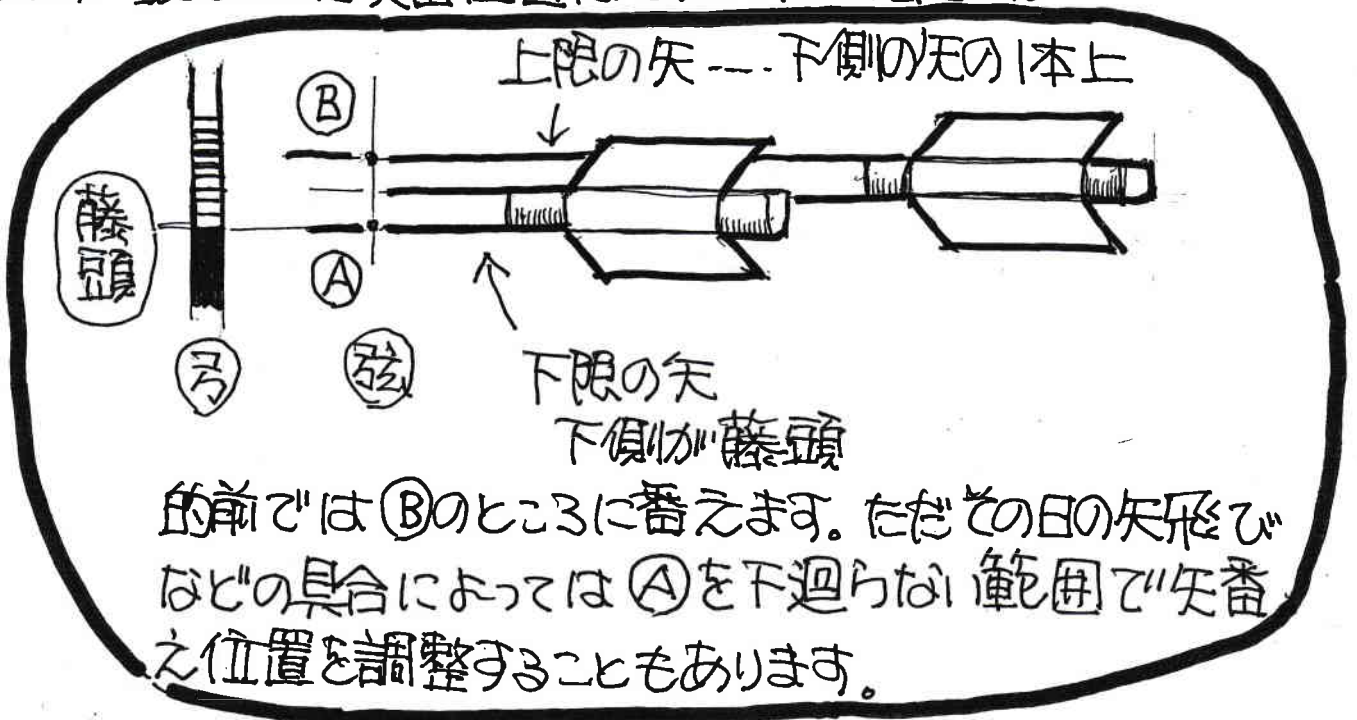
弓を床に平らに置き床板の板目で直角の位置を割り出す人もあります。道場の床は昔土足で踏むところであるからみだりに弓具を横たえるものではないと教えられました。

中仕掛の位置

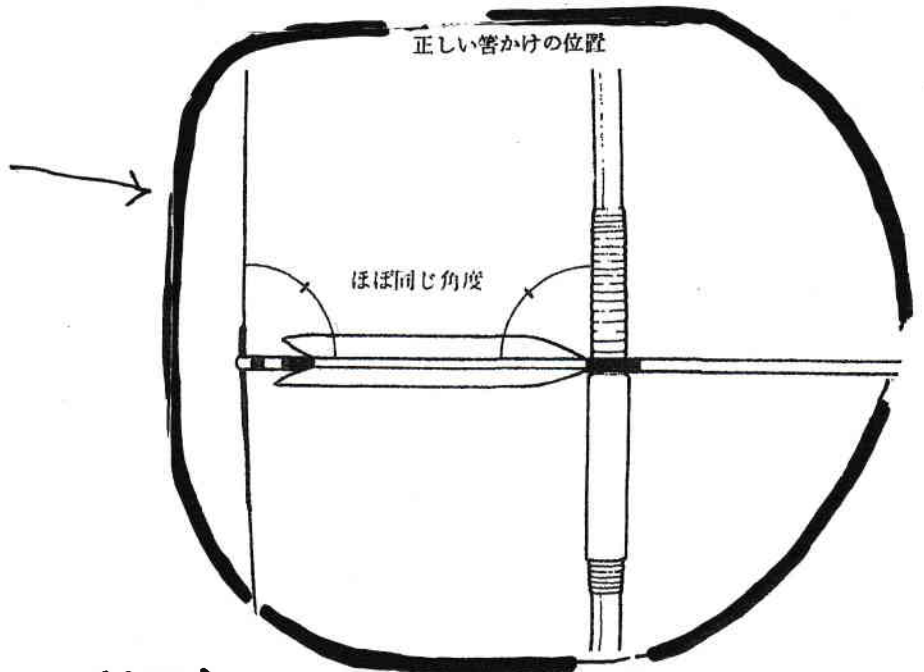
先は述べたように中仕掛は矢番えの位置に合わせて巻く
ことになります。

矢番えの位置は藤頭を基準にしますが巻り出し方には幾つ
かの方法があるようです。

自分が教えられた矢番え位置はこのような方法です。



浦上博子先生は
右のように説いて
おられます。
(初心者向けの弓道)



矢番えの位置

矢番えの位置は矢飛びと的の中に深い関係があります。

矢番え位置の原則は前頁(12ページ)の略図で云えば③の位置で 下限の矢の1本分上のところになります。

ただしこれは原則であって④と③間で自分の矢飛びが最も良い位置を射手が自分で見つけ出すようにと教えられました。

更に 初矢一筋に習いありと云う教え(口伝)もあって日によってその日の最初の矢の矢所でその日の射のあり様を良く考へ矢番えの位置を微妙に上下させる率も言われています。

矢番え位置の前提は会に於て発射する時 その矢の下側が正しく籐頭に位置していることです。

射の進行に連れ 弓手手の内の親指の根は押されて高くなる率を考えなければなりません。

正しく矢番えをしていても矢が放れる時親指の根が籐頭より上って行けば 矢に撥れて親指の根の皮を傷めることとなります。

巻き始めの位置の決め方

身手ごとで使用する矢の太さ(直径)は一様ではありませんが、7ミリの矢が多いと思われる。

使用する矢の直径を仮に7ミリとすると1200ミリの径各図で去えば⑧は④から14ミリになります。

従って巻き始めの位置は14ミリに6ミリを足した20ミリとなりここに巻き始めの印を付けます。中仕掛の上立端との間隔は6ミリとなりますが、これ位なら仕上った中仕掛に矢番え位置の線を引かなくても見当が合います。(矢番え位置に線を引くことは控えて)矢番えと中仕掛の上立端とが15ミリ以上あれば矢番え位置の印が冴ることとなるでしょう。遠目でも分かる様な線をつけるのは出来れば避けたいものと思います。

仕掛麻の巻き方には幾通りかの方法があります。

中仕掛のトラブルは使っているうちに矢番えのところか細くなることが多く、そのほかには知らないうちに中仕掛そのものが上下にずれて動いてしまっていることすらあります。

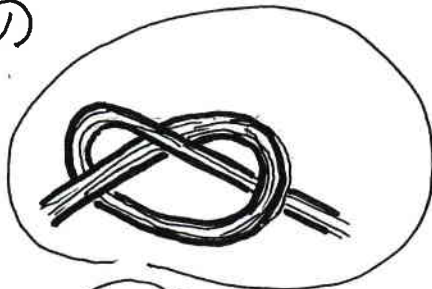
このようなトラブルの原因は仕掛麻の巻き方が緩いことから起きています。

どの方法で仕掛麻を巻くにせよ仕掛麻を強く引張って強く巻く事が重要で。

中仕掛

用意するもの

仕掛麻



仕掛麻は切れ弦で作るか
弓具店で購入します。

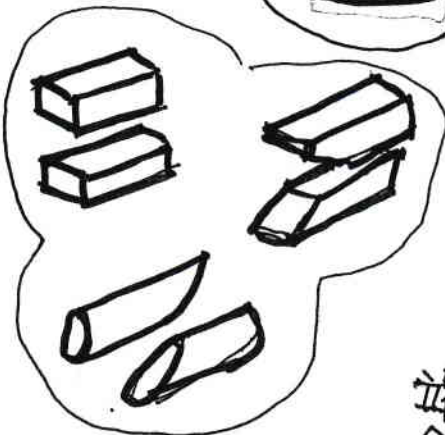
糊



中仕掛としての仕上りが柔らかく
ゆがみの弦枕にやさしいと云
われている液体糊やデンプン
糊が適している。

木工用接着剤ボンドは中仕掛の仕上り
が硬いので弦枕のためにあまり好ま
しくないと云われる。
ボンドの場合には2倍にうすめること
が良いと聞く。

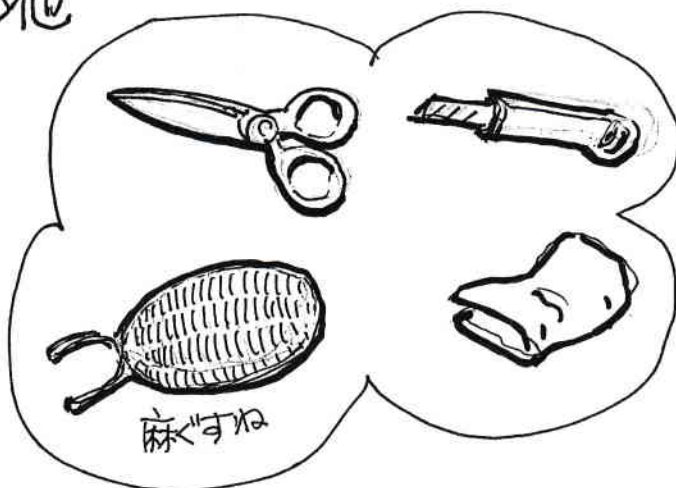
道宝



道宝の形は長方形のもの、その片面を斜め
にしたもの、すい棒の一端を斜めにし
たものなどがあります。必ずしも
堅い本でなければなりません。

端が斜めに切られているものは
斜めの面を使用します。

その他



中仕掛を作るには
はさみはとりわけ必須で
す。

麻くすねにはくすねを
はさむと良いでしょう。

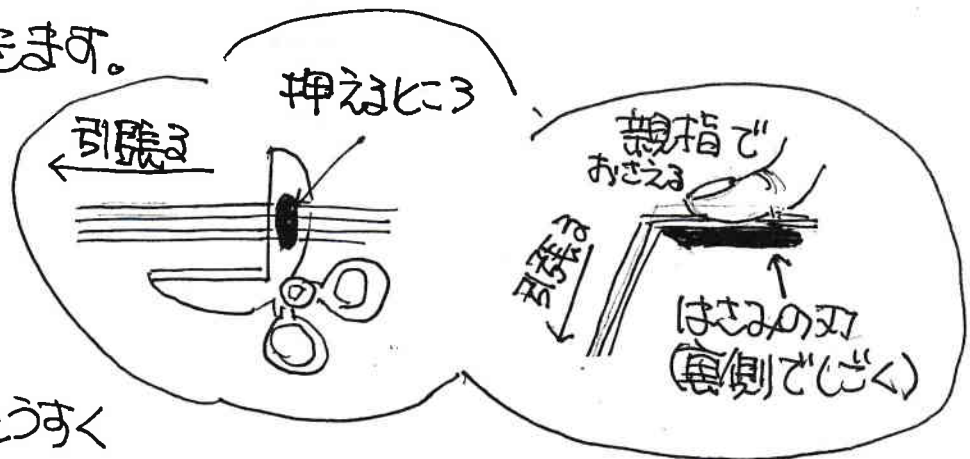
ハンカチは指についた糊を
拭き取ります。

仕掛麻を巻く

矢の筈の溝の中は矢師(弓具店)によって異なります。
 自分の矢に合う仕掛麻の量や巻き方は何度も繰り返して
 手(指)で覚えるようにします。

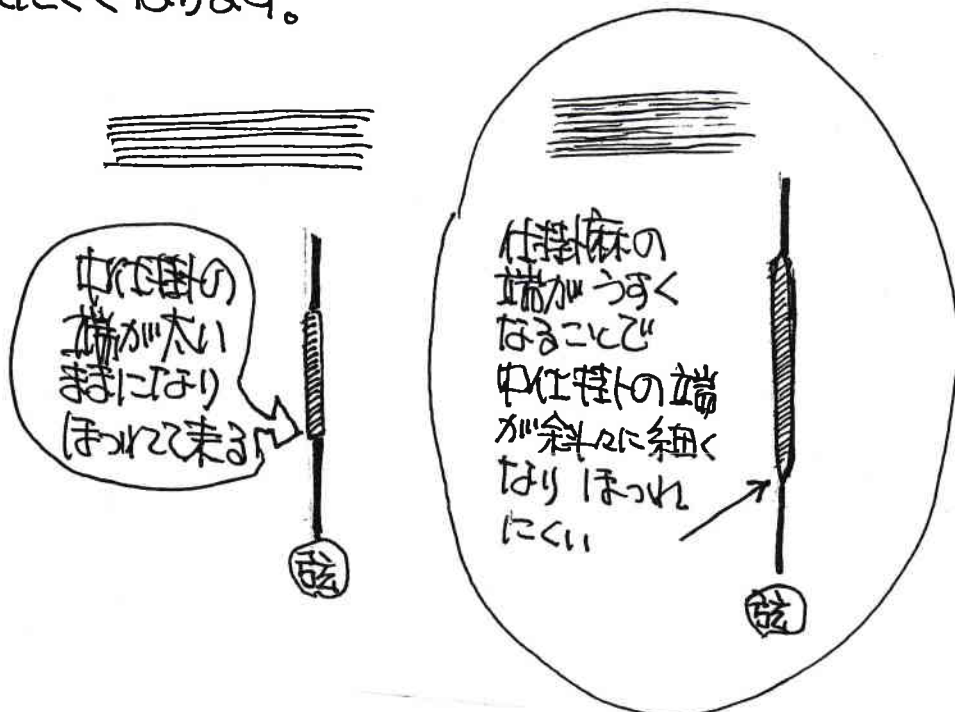
筈溝に合う適量の仕掛麻を道宝でしごいてちぢれを伸ば
 すと柔らかくなり巻き易くなります。

仕掛麻の両端 2~3センチははさみの刃の裏側でしごいて
 麻をうすくすみます。



仕掛麻の端をうすく

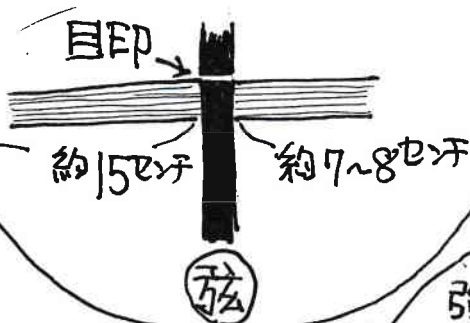
すくことにより仕掛の端末が紡錘形になり
 ほつれにくくなります。



中仕掛を作る時は弓を弓立に立てて膝立ちで作業するか、弓を横たえて床にあぐらを組んで作業します。膝や腰に支障がある場合は弓を立てて作業します。

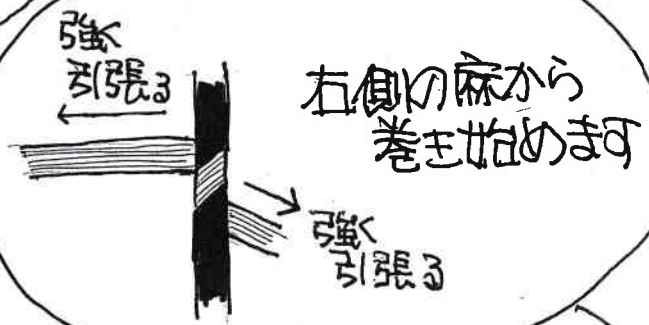
一般的な中仕掛の作り方

弦につけた目印に合わせて弦の向う側から仕掛麻を当てる。



仕掛麻は糊が浸透しやすいように巾広くひろげて巻いて行きます。

中仕掛の長さは8~9センチに仕上げます。

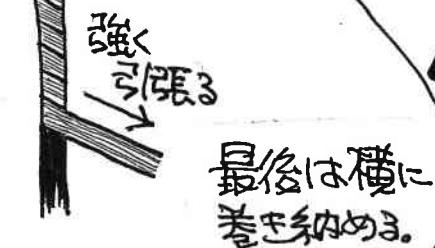


糊は一度に長く塗り付けると巻いている途中の仕掛麻に付いてしまい広げて巻くことが出来なくなります。

仕掛麻を巻きながら2度か3度に分けて塗ります。

右側の麻巻き終わったら左側の麻を右側の麻の上に巻いて行く。

右側の麻の巻き終わったころを越えて行く



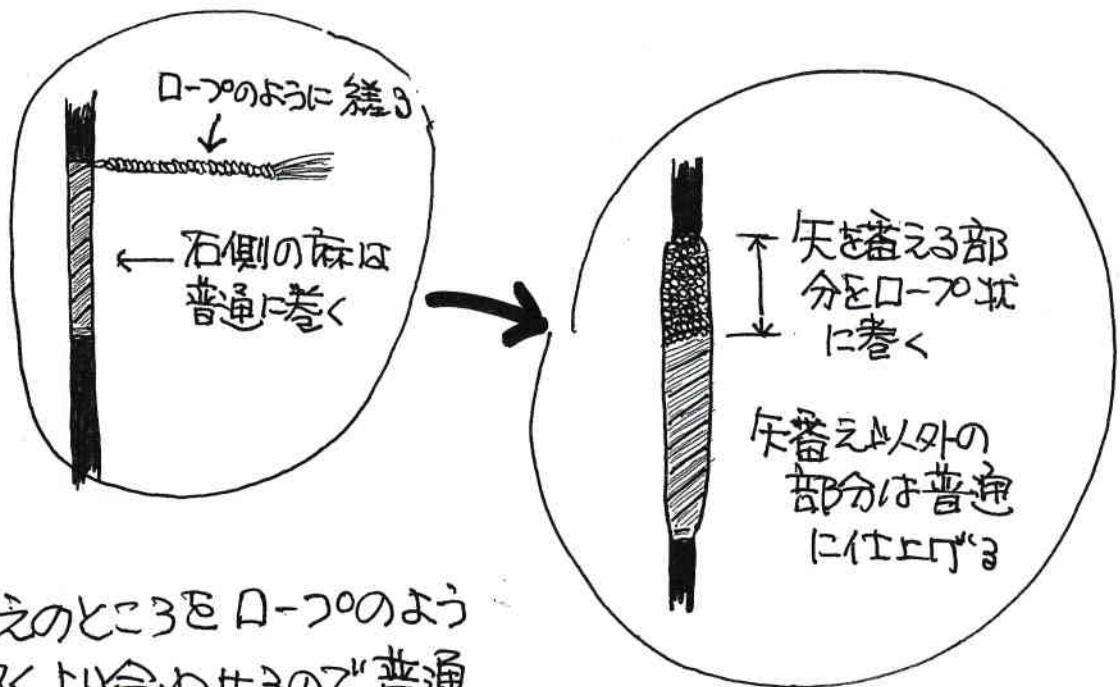
すこし変わった中仕掛の作り方

仕掛麻をロープの様に纏って巻く方法

目印に合わせて弦の向う側から仕掛麻を当てて一般的な作り方と同様に右側の麻を巻きます。

即ち 仕掛麻は巾広に平たく、強く引張りながら下に巻き降り、うすくさいた終末は最後に横に巻き納める。

次に左側の麻はロープのようによって巻きます。その時はかたくよじって右から巻いた麻の上に巻き重ねます。



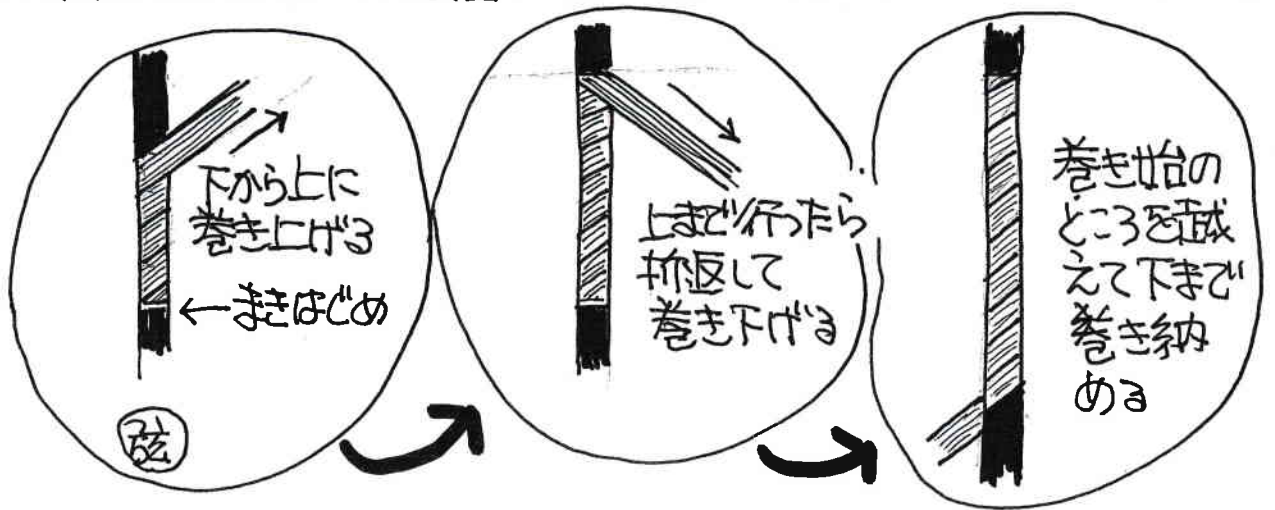
矢蓄えのところをロープのように堅くより合わせることで普通の仕掛よりもほんわかしくなれます。

ただし箆溝に合わせた太さに仕上げるのは慣れを要します。

亡くなられた弓師の松永重功さん(教士)はこのようにロープ状によった仕掛を上から下まで施しておられたと聞きました。

すこし変わった中仕掛けの巻き方 (その2)

たしか古い記憶で正確だったか多少不安もありますが小笠原流の先代宗家(清信先生)の著書には下図のように説明されていました。



このような巻きかたは一般的な巻きかたのものとはどのような差異があるものが長い間疑念に思っております。

(仕上がった形状は一般的な巻きかたのものと差がありません)

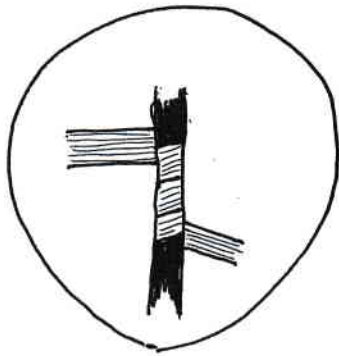
今回この資料を作るのに際して^{しんにほんりゆう}真神日本流の流れを斟む方に教えていただきました。その効能も次の通りです。

一般的な作り方では最初の巻きは左下がりであり、それから右下がりに巻くので麻を巻く力の方向が前半と後半とでは異なることになる。

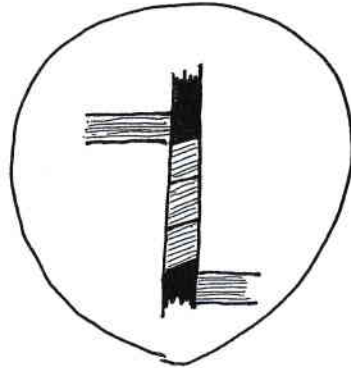
対してこの巻き方は一つの方法(右に巻く)なので緩みが生じにくく道空による締めが効く。

このことでありました。

仕掛麻の巻き方で 中仕掛の太さや長さを調整することが出来ます。



重ねを多くすると中仕掛は太くなります。
一方中仕掛の仕り長さは短くなります。



重ねを少くすると中仕掛は細くなります。
仕りの長さは長くなります。

出来上がった中仕掛が太すぎて箆溝に入らない場合はヤンチで平らに押しつぶすしかありません。この場合中仕掛の断面はだえん形になるので、番えられる向きは限られることとなります。

ヤンチで挟んでも修正し切れない場合は、一旦作った中仕掛を剥して最初から作り直さなければなりません。

仕上がった中仕掛が箆溝より細い場合は少な目の麻で上から巻き足します。